2023_1030「森影の月食と木星（写真）」日々の理科 3371 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

天体写真を撮る者には、３つのタイプがあるように思います。一つは「天体そのもの」たとえば、「アンドロメダ銀河」や「ペルセウス座二重星団」といった、銀河系内外の美しい天体を、できるだけ拡大して美しく撮影する者です。これには倍率も分解能も良い天体望遠鏡と、恒星や星雲の日周運動を正確に追尾する、性能の良い「赤道儀」が必要です。しかしアマチュアの天体写真かがどんなにがんばっても、研究施設の大型の望遠鏡や宇宙望遠鏡には絶対に勝てません。

二つ目は「星座」や「星の並び（たとえば夏の大三角）」の撮影を得意とする者です。これらは「星野写真（せいやしゃしん）」と呼ばれ、理科の教材にもなります。しかし星座や星の並びは、１年や２年で変化するものではなく、機材や条件が同じなら、いつどこで撮影しても同じ写真しか撮れません。

私の天体写真のスタイルは上記のどちらでもありません。できるだけ地上の風景を写し込んだ天体写真を好んで撮っています。これは、ある時期のその場所でしか撮影できない天体写真になります。可能なら、季節感や人の営み（たとえば街の灯り）、それに特徴的な地形のシルエットなども入れて撮影しています。

今回の月食も、西の地平線付近で観望できました。「情景天体写真派」の私にとっては、最も条件の良い月食です。更に、月食中の月を追いかけるように、左上に木星も見えていました。木星は月に比べると格段に暗いので、月に露出を合わせると、写真にはほとんど写りません。この写真は、木星に露出を合わせたので、月が欠けている様子は、辛うじて写っている程度でした。　　（2023 年 10 月 29 日午前 5 時 50 分頃／北軽井沢）